

演題番号：A5

15ヶ月齢の黒毛和種肥育牛にみられた地方病性牛伝染性リンパ腫

○森内誠子

三重県農林水産部家畜防疫対策課

1. はじめに：地方病性牛伝染性リンパ腫 (EBL) は牛伝染性リンパ腫ウイルス (BLV) の感染により引き起こされる疾病で、好発年齢は4～8歳であるが、近年では若齢での発症も報告されている。今回、15.9ヶ月齢の黒毛和種肥育牛にEBLを認めため、概要を報告する。

2. 発生概要：管内の300頭規模の黒毛和種肥育農場で、15.9ヶ月齢の個体が食欲不振、呼吸促進を呈すも、発咳・発熱はなく肺炎は疑われず、加療に反応しないため、剖検・精密検査を実施。

3. 材料と方法：鑑定殺後、当該牛の臓器及び血液を病理組織学的検査、ウイルス学的検査、ELISA法によるBLV抗体検査及び血液検査に供した。病理組織学的検査では諸臓器についてHE染色を実施。ウイルス学的検査では白血球浮遊液及び諸臓器乳汁から抽出したDNAを材料としたBLV遺伝子の定量PCR及びインバースPCRを実施。

4. 検査成績：剖検所見において、全身のリンパ節は腫大し、断面は白色を呈していた。心臓では心嚢の不均一肥厚、心外膜の部分的白色化、心耳の不均一白色肥厚、右心室壁及び心室中隔の筋層内の白色結節を認めた。脾臓は高度に腫大し脆

弱化、腎臓では包膜下において表面凸凹かつ一部白色化、断面にて実質内に白色結節を認めた。子宮壁は肥厚かつ硬化し、断面は膨隆していた。肺および肝臓に異常は認められなかった。血液検査では白血球数の増加(670, 000/?l)、血液塗抹標本にて異型リンパ球を多数確認。血清を使用したBLV抗体検査では陽性(S/P値2.32)を示した。ウイルス学的検査では白血球浮遊液、心臓、脾臓、腎臓及び子宮において、高いBLVプロウイルス量を確認。また、インバースPCRの結果、複数検体で共通したバンドが確認され、BLV遺伝子のモノクローナル化を確認。病理組織学的検査では子宮、心臓、腎臓、第四胃、脾臓及び全身のリンパ節において核分裂像を伴う大小不同のリンパ球様腫瘍細胞の浸潤増殖を確認。

5. まとめ：各種検査結果より、本症例はEBLを発症していたと診断。肺に異常は認められず、心臓の複数個所で腫瘍化が確認されたことより、呼吸促進の原因は心臓からの血液循環不良の影響であると考察。

6. 考察：EBLは若齢化が指摘され、肥育農場の大きな損害になっている。肥育牛のEBL対策としては、肥育素牛のBLV感染率の低下が不可欠で、繁殖農場でのBLV対策が望まれる。